

る情報量である。「逆耳」とは、「記憶システム」から漏れた情報。他者の声が聞こえてくるという症候である。つまり、「ゴミ屑」として「記憶」が捨ててしまったものが逆流してくるということである。例えば「坊は、きつと偉い人になりなざるわ」という言葉は、昭和三十年代、戦後の混乱期であった少年時代、行商人だった朝鮮人の言った言葉である。「ピーピー、おーおーおー」という笛の音と声は、知恵遅れのタケ少年の声である。また「私、あなたに比べられないわ」というのは、交際していた六歳上の女性が別れに言った言葉である。あるいは「僕、どうしたらえんやろ?」とは、教師時代に担任した生徒・タカトシが人生の岐路で主人公に向かって放った迷いの言葉である。普段は完全に忘れてしまっている、記憶の完了形から外れている未完了な過去の断片を繋げて、一つの小説を作っていくという方

法が面白かった。

次に読むのは、小松原蘭『茶箱』(『季刊遠近』第73号)である。前回の「妹」と同様に小松原蘭の作品の出来が群を抜いて優れていた。この作家の魅力はどこにあるのか、数日間、頭の中でその問いが離れなかった。まず、この『茶箱』を分析することとそれを考えることから始めたい。

主人公は美羽という五十歳前の独身女性であり、九十歳近くになった母を養護施設に入れ、自分はマンションに移る準備をするため永年住んだ家を整理している。その時、幼い頃の服や夏休みの絵日記作文等を入れていた空の「茶箱」が見つかる。母の実家は海苔問屋であり、海苔を入れておく「茶箱」には、四、五歳の頃の自分と従兄の保の手形がついており、美羽は一挙に過去に引き戻される。二歳年上で従兄の保とは家が近いこともあって、幼い頃から、

人で遊んでいた。茶箱は二人の「秘密基地」であり、蓋が閉まって危険だと大人達には禁止されていたにも拘らず、狭い空間に体を寄せ合って隠れていることが、幼い二人にとつてこの上ない喜びだったのだ。当然のように二人は恋仲になり、将来海苔問屋を二人で継ぐ夢を語り合うようになる。状況が変わるのは美羽が高校に入った頃である。従兄妹同士の関係に、世間の、あるいは保の両親の、それに自分の母親の冷たい視線を感じるようになり、美羽はこの関係から身を引くことを決意するのである。新しい恋人が出来たと見せかけ、美羽は保と距離を取るようになる。その結果、保は大学を出て、傾き掛けた海苔問屋を継ぐことを選ばず、カナダに留学して体を壊し、二十五歳で急死してしまうのである。残された保のパソコンに美羽への想いが綴られていて、美羽は世間体で拘って一番大切なものを失っ

てしまったという後悔の念に苛まれる。そして、二十五年間独身を通じた美羽は、忘れていたはずの「茶箱」の出現に再び心を揺さぶられるのだ。母を介護施設に委ね、自分はマンションに移って仕事に専念するなら、「茶箱」は処分しなければならぬ、果たしてそれは正しい選択だろうか、という逡巡である。「茶箱」は、ここで人生という「迷路のごみ屑」である。このごみ屑を解説していくことで、美羽は古くなった自宅で母を介護しながら仕事もしていくという決心をするということである。小説は終わることになる。

この小松原蘭の小説の優れたところは何か? 前作『妹』も絡めて考えてみたい。

第一に、現代人の倫理の問題を的確に把握しているところである。つまり柄谷行人の言う「近代文学」の終焉以後の「現代文学」の倫理を提示できているところである。

「近代人」の倫理とは、志賀直哉の「家」の問題や、大江健三郎の「国家」の問題に象徴されるように、「家」/「国家」といった制度的な権威から自立した自我、所謂近代的自我を持った個人を確立することである。「制度的権威」/「国家的理性」に批判的な距離を置き、行為し思考する主人公を描くことによつて、「個人」の「在ること」を定立することが「近代文学」の問題である。それは、要するに「国家」の関数である「個人」を稼働的な要素として「制度」/「国家」の問題を考え、解決していくことなのである。カントの「批判的合理性」とは、そうした「自我」/「主体性」の論理ではないが、それは大江健三郎の「父」への反逆の物語として、中上健次の「父」への反抗/同一化の物語として完結したと言える。(ラカンがフロイトの『モーゼと一神教』の父と息子たちの物語を前半は「反逆」の物語として後半

は「同一化」の物語として読んだ。)したがって、柄谷のように「近代文学」が終わったと宣言するだけではなく、それが終わり、「現代文学」が始まったという観点で物事を考えていかなければならない。「近代」/「現代」の境界線は多様に考えなければならないが、「カント」/「ヘーゲル」の問題に絞って、柄谷が言及し、理解しているアメリカの社会学者・リースマン(『孤独な群衆』の著者)の弟子であり、リースマンを批判しつつ仕事を展開したリチャード・セネットに従つて、新しい地平を考えてみたい。考えてみよう。柄谷の大好きなカントの三批判の本質は、認識/倫理実践/美的感覚のそれぞれを分離して主体性/自我の在り方を論じたということにある。つまり、普通の人間が晒されている「複合的なシステム」から来る諸矛盾が最初から排除されている純粹な論理的/倫理的/美的空

間が想定されていることに、その本質があるのである。それが「形而上学」の在り方であり、ハイデッガーの言うように「形而上学」とは「思うこと」によって「在ること」を決定する学だからだ。ヘーゲルの『精神現象学』の第一章、「意識」の章は「形而上学」の側から読み得るものであり、ハイデッガーが、第一章だけで『精神現象学』の解説を止めてしまっているのはそのためである。つまり第一章は近代的意識の問題、「思うこと」／「在ること」の矛盾を統合するという問題である。柄谷は第二章の承認を巡る闘いを単に商業社会の倫理（売れるか売れないかの問題）として無視しているが、ここから始まるのが「現代」の問題なのである。

第二章は、「自己意識」の章であり、自立し、対他的意識を内包した「自己意識」／「個人」が承認を求めて闘うこと、そして労働するとい

う実践を引き受けることによって、再び「主人」／「奴隷」という分裂した意識を持たざるを得なくなるということから始まる。この「主人と奴隷の弁証法」と呼ばれる第二章が再び注目されるようになったのは（マルクスが革命の示唆を得たように）ヘーゲルが「市民社会」と「国家」の対立・矛盾が「国家」の側で解消されると考えたが、そうはならなかったという点にある。現代こそ、「国家」と「市民社会」／「資本主義社会」の、あるいは「思うこと」／「在ること」と「労働すること」の矛盾に人々が苛まれていた時代はないからである。柄谷の言う「近代文学」とは、「個人」の「思うこと」／「在ること」の分裂を「国家」／「制度的権威」の同一性が最終的解決する文学のことである。もはやその時代は終わり、柄谷の言うように「文学」は取るに足らないものになってしまったと考えるべきではなく、別

ていること、そしてこの労働するという問題を通して、パターナルな官僚主義である「精神病院」と「介護システム」に直面することを描いているという点において、「近代的」ではない、「現代的」な文学の問題を提出できているのである。第二に小松原蘭の主人公は、私が極めて現代的な個性として取り上げるべきだと考えている「ナルシズムの個性」を典型的に提示している。「ナルシズムの個性」とは、オイディプスの権威に組み込まれていない未成熟な個性のように考えられがちであるが、スロベニア出身の現代の代表的な哲学者であるジジェクはオイディプスの権威が機能していない現代において、「ナルシズムの個性」は、オイディプス期以後の個性でもあると考えるべきだ、と言った。先の論点と絡めて考えるなら「国家的理性」／「オイディプス」との関係ではなく、その不在を埋める「温

の地平に、新たに矛盾を背負うことになる地平に移行したと考えるべきなのだ。

何度でも言うが、「近代」／「現代」の亀裂は多様であるが、この「思うこと」／「在ること」／「労働すること」の矛盾は大きな問題である。まず「近代的個人」／「自我」／「主体性」が機能しなくなったということとは、個人が自立したということではなく、「制度」／「国家」が、「個人」に倫理的責任を負わせることによって制度の問題を解決していくというやり方がもはや通用しなくなつたということであるとセネットは考える。彼は、『権威への反逆』において一九六八年以後のアメリカの左翼主義の壊滅を受けて、権威への反逆（柄谷は大学紛争の闘士であったが、大学紛争のような反逆）は要するに父に依存しながら父に反逆するという「家族の物語」として成立したに過ぎないと考えた。（父に経済

情主義的）／「冷淡な」官僚主義との関係で自分自身の労働と存在の問題を考えなければならぬのが「ナルシズムの個性」である。

クリストファー・ラッシュは一九六八年以降の左翼政治主義の衰退から起こったアメリカの没政治的状況を「ナルシズムの時代」として考察した。柄谷の言うように、アメリカの社会的状況と日本のそれは十数年の誤差があるが、アメリカの社会状況の変化はそのまま日本のものでもある。日本の左翼が決定的に敗北したのは、浅間山荘事件一九七二年であるが、左翼的な言説・運動はまだ機能しており、その決定的な変質が見られるのは一九八〇年代になってからだろう。当時社会的な事に無関心で自分の趣味に没頭する「オタク族」が出現したが、そうしたのも「ナルシズムの個性」の一つである。ラッシュの言う「ナルシズム的

個性」とは、「オタク族」のように「主体」が「対象」に対して情動を集中させることによって社会的葛藤から生まれる心理的矛盾から逃避するものではない。フロイトは「対象」／「主体」の分化を第一次ナルシズム、「主体」／「自我」の分離を第二次ナルシズムと考えたが、この第二次ナルシズムに拠る個性がラッシュの言う「ナルシズム的個性」である。それは、メラニー・クラインの影響を受けて考えられ、潜在的・母性的領域で「良い母親」と「悪い母親」に葛藤があるがゆえに、「自我」が作りだす「理想自我」のイメージに理想化と攻撃性の双方が込められていくような個性のことである。ラッシュの概念はジョン・レノン襲撃事件や、ストーカー殺人、アイドル襲撃事件を理解するのに都合のいいものである。彼らは自己の投影である理想自我として想像的他者を熱愛するが、相手がそれに応じないと

攻撃性を向けるからである。しかし、ラッシュは批判的に「ナルシズム的個性」を捉えたが、セネットがラッシュより早く「ナルシズム的個性」を発見し（『公共性の喪失』において）典拠にした原初的なテキスト、コフートの『自我の分析』に立ち戻るべきであると思われる。コフートが言っていることで注目すべき点は「ナルシズム的個性」は、「分裂症」という症状の一步手前にあるものだ、ということである。

分裂症（第一部）において、分裂症の氣質を、資本主義という機械を稼働させるための歯車の要素と考え、日本でもその影響を受けた浅田彰が能天気にも「スキゾ・キッズ」を自認し、活動したことがあった。猛烈に働き、猛烈に遊ぶ、過度に自己管理をし、過度に享樂する、といった振幅の大きい破綻した個性こそ、資本主義を稼働させていくものだ、ということなのだろう。

私の考える「ナルシズム的個性」は、コフートの言うような「分裂症」にならないために必死に堪えている個性であり、資本主義を稼働させていくために猛烈に労働し、猛烈に消費するという分裂に、あるいは汝為すべし、という母性的欲望との間の分裂に、どうにか耐えている個性のことである。

ドゥルーズとガタリは、『アンチ・オイディプス』（『資本主義と精神分

『妹』における「ナルシズム的個性」とは、フロイトが「子供が叩か

れる」という小論で考えた体制、「父が私を叩く」／「オイディプスの体制の前の状態、「父が嫌いな妹を叩く」／（「私」を愛していると思われたいので妹を叩く）という心的体制である。妹というライバルに対して負けないために淫らな父に気に入られようとする、ということから全てが始まる物語が『妹』なのだ。そして、「分裂」は「姉」／「妹」の間で現象的には別々に現れるのであるが、「姉」は「妹」を常に意識しながら、「妹」のようにならないように努力しているという点で分裂を抑圧しているのである。これが『妹』の「ナルシズム的個性」である。

対象のイメージは、一つは「母の身体」のイメージとして第一次ナルシズム期に、一つは「自我のイメージ」に相関的なものとして第二次ナルシズム期に形成される、とラカンは考える。前者は、「性愛」の、第二のものは「恋愛」の対象のイメージの延長上にあるものであり、ナルシスが自分の像に魅せられるように異性として現れる「自分の像」に魅せられるものなのだ。こうした「自己の像に魅せられること」／「死」と「そこから離れること」／「生」の分裂として従兄愛を描いたことが、この『茶箱』の「ナルシズム的個性」の問題なのである。

てみよう。第一の時間は、美羽と保が「茶箱」の中で四、五歳の頃身を寄せ合っている時間である。これは、性的な目覚めとして第一次ナルシズム的な時間、つまり美羽が性的な分化と異性の身体を感じる性的欲望の主体として自らを構成する時間である。第二の時間は、美羽と保が海苔問屋の将来について語り合う時間である。これは、「自我の形成」／「第二次ナルシズム期」とともに、美羽が恋愛の主体として自己を構成する時間である。この時間は、第一の時間に、ドゥルーズの言う「重ね書き」されているのであり、そのために美羽にとっては「自然」な、あるいは濃密な関係として従兄愛が形成されるのである。

第三の時間は、美羽が保を遠ざける高校時代の時間である。「従兄愛」は、社会的関係の側から考えた場合、「近親相姦の禁止」の中にある原理



に触れるものである。レヴィニストロースは、「近親相姦の禁止」とは、女性を性的な対象として「家族」／「親族」の外の交換のサイクルに投入するため、いわば内部留保を行わないための流通の原理であると考えたが、ここでは美羽の母、保の両親にとって美羽と保の結婚は一族の中で交換のサイクルに入るべき対象を内部留保するようなものである。禁止の原理に触れるものなのである。したがって、美羽が保を遠ざけるのは、自己を性的欲望の主体として形成しているシステムとともに自己が性的欲望の客体として交換のサイクルにある、というシステムを受け入れることである。ここで、美羽にとって最初の迷路が始まり、性的欲望の主体であることを抑圧し、性的欲望の客体としてあることを選ぶということになるのだ。

第四の時間は、美羽が保の死に直面する時間である。美羽は、別れの

「クッションの綴じ目」として、「茶箱」Ⅱ「子宮」は機能するのである。

具体的に言えば、「茶箱」Ⅱ「子宮」は二つのことをもたらすのだ。

一つは、母性的な膜に包まれて羊水の中を漂いながら、ぶつかつたり反転したりしていた双子もやがて微睡みから目覚めて、人として生まれ、離れていかなければならないように、従兄愛は自分にとって生きていくために失わなければならないものの象徴である、と気がつくということである。それは、逆にそうであるが故に逆に子宮の中のような完璧な愛を空想するのであり、従兄愛を理想化するのだ、ということに気がつく、ということでもあるのだ。ラカンが人間にとって欲望の対象とは予め失われた対象としてある、と言ったように、従兄愛とは予め失われたものとして美羽の欲望と追憶を掻き立てるのである。

もう一つは、「茶箱」Ⅱ「子宮」

選択を行った結果、自分のことを死ぬまで想ってくれていた保を死なせ、一番大切なものを永遠に失ってしまった後悔に苛まれる。自分の選択が保の人生を破壊し、また自分の人生を歪めたからである。この過去を振り返るといふ行為が、美羽の人生をもつと複雑な迷路に変えるのである。保の両親や自分の母を責める気持ちも描かれている。だが表立って彼女がそうしないのは、結局は自分の責任で行った選択が保を死なせたと考えるからである。この第四の時間が、先の三つの時間と異なるのは、「主体」の問題ではなく、「他者」との関係の問題であり、「原因」の次元にあるものではなく、「結果」の次元にあるということである。

第五の時間は、美羽が幼い頃保と入っていた「茶箱」を母親の子宮のようだと想像する場面である。これは、「茶箱」という「ゴミ屑」、捨てられようとしていた「ゴミ屑」の特

という等号は、美羽の子供時代を母性的体制と見なすということである。それは、彼女を取りまく木更津の伝統的な産業・海苔問屋とそこに働く近隣の大人たちを含めた産業構造時代が母性的体制であったということを確認することである。そして、それを破壊した後期資本主義システムとの関係で、彼女が現在直面している「母を施設に入れるべきか」というパターナルな官僚システムの問題を把握することを可能にするものである。パターナルな官僚主義の象徴である「介護システム」の代表者の言葉「お母さんの介護をされるために、仕事を止める決心が固まりましたか？」という脅しであるとか、介護施設は「楽しく希望にあふれた幸せの住処ですから、あなたは安心して働けますよ」といったパターナルな誦い文句の嘘を拒絶し、美羽は仕事を十分できなくても母を介護しながら昔の家で住もうと決意するの

殊な解釈である。というのは、「茶箱」は、実際は、第一次／第二次「ナルシズム期」の象徴にすぎないのであって、それは「母性的体制」Ⅱ「子宮」のようだと考えることは、拡大解釈、増幅された解釈でしかないからである。ラカンは精神分析の言う「退行」を、時間的な過去に遡及するということではなく、遡及した過去の対象の意味作用を変えようということだ、と言った。そうした意味で、この美羽の行為は「退行」、つまり解釈の変更なのである。

「茶箱」Ⅱ「子宮」という等号は、したがって、どこにも存在しない時間、観念の中しか存在しない時間を作り出す。それは「可能性」の次元ではなく、「不可能性」の次元に属するものである。しかし、そういう次元を作り出すことによって、このテキストの他の意味するものを束ねるものとして、ラカンの言う

である。そして、失われた時初めて何かの大切さに気がつくように人が生活していくということは、普段は気がつかないが失われて初めて大事なものが分かるような些細な日常生活を積み重ねていくことではないのか、ということに気がつくのである。そして、そう考えることは自分を含め、母や叔父／叔母が、保を死なせたことを許すということでもあるのだ。

この結末は、セネットがヘーゲルを解釈しながら「主人と奴隷の弁証法」を奴隷が抜け出す道として提示したものと似ている。「労働を通じて奴隷は、自分が本当は何者であるかを意識するようになる」ことが精神の自由を得ることだということである。美羽にとって母を養護施設に入れて自由に仕事をするのと母を自宅で介護しながら仕事を制限することの二つが選択肢としてある。後者を美羽が選ぶのは新自由主義の経

済の奴隷になることを拒否し、自分を育ててくれた古き良き故郷を大切にしながら労働することが、精神の自由を「主体」として未来に立ち向うことのできる位置を得ることだと言えらるからである。

隅々まで行き届いた感性・思考そして筆力によって現代人の自立を描いた傑作である。

同じく女性の側から「従兄愛」を描いた西田宣子「手袋とサボテン」(『季刊午前』第58号)を読んでみよう。主人公は二十三歳の女性・弘美である。彼女は「兄」と呼んでいる従兄と二人でアパート暮らしをしている。仕事は洋服の販売であり、従兄の光一は三歳年上で中学校教師である。弘美は五歳の時、病気で母を失い、小学校四年生の時に父も亡くなって母の妹夫婦に育てられたのである。母の臨終に間に合うように走る父の背中揺れている感覚が弘美の記憶の中で執拗に反復される。

ているのである。従兄愛を通して、女性という存在の社会的な関係の中の不安定さ、困難さを描いた作品である。

次は津田一孝「母なるりん」(『季刊作家』第95号)である。主人公は二十代の真史、スーパーマーケットに勤める青年である。真史には大時代から付き合っている麻紗子がいる。麻紗子は大学卒業後三年でデザイン事務所を設立したやり手である。麻紗子に言わせると真史には、潜在意識の中に不安があり、それが自信のなさに現れている。というのは、真史は自分の出生を知らない。父も母もいなく、祖母が母として育ててくれたのである。そして、自分とは一体何者なのか分からないということが振舞いの中で不安として現れているようなのである。この「不安」は、職場の上司によって解釈され、かろうじて支えられている。経済的原理は、予測不可能なもの、偶然性

揺れる感覚とは頼るものがなくなつた不安な気持ちの表れなのだ。そうした揺れる感覚を固定させてくるのが、弘美にとって叔母夫婦であり、従兄の光一との関係なのである。だが、弘美はいずれ従兄と別々に暮らさなければならぬ日が来ることを覚悟している。ある日、弘美は従兄が同僚の美智先生と喫茶店に入つていくのを目撃し、従兄がこの美人の先生と結婚するのだと直感する。従兄は弘美に結婚話を直接話す事をためらうが、婚約者の美智から「あなたの大事な兄さんを奪つて申し訳ない」と謝られ、頭では納得しても従兄を慕う感情は抑えられない。そして、従兄はアパートの部屋を出ていく。その話と並行して、弘美に大きな展開があるのは、祖母が訪ねてきて母の遺品の詩集を渡されたことである。その中で、愛する人と別れなければならぬ「運命の断層」について書かれた詩が目にとまる。

によつて進行していくのであり、それに備えなければならぬ、ということである。つまり、真史の「不安」はポジティブなものであり、未知で流動的な経済システムに対処する原理になるということである。しかし、それはつねに未決定のもの、固定されないものに神経を向けていないければならないという真史の張りつめた気持ちに繋がるものである。

そこに祖母が危篤である、という知らせが届く。急いで知らせをくれた病院に駆け付けると祖母はすでに亡くなつており、葬儀社の手配もすでに生前の祖母が行っている。葬儀が無事終わった後、郷土資料館で新聞記事を読んだ真史は、自分の母は昔親類だと思つて過ごした家の長男と恋仲になり、家の格式の違いから父に強烈な反対を受けて二人で駆け落ちして暮らしていたが、真史を身ごもり、郷土で新しい生活をやり直そうと帰つて来たその日に自動車事

そして、祖母に貴女の母親は大学生活を終えて帰つてきたときに既に苦しみぬいて疲れ果てており、それを救つてくれたのが父親になる人物だったという話を聞く。そして、女性として生きるということは、自分を守つてくれる家庭という安全地帯から離れて漂つていくことだと論じられるのだ。

『手袋とサボテン』の手袋とは、従兄・光一の深緑色の手袋である。片方は夢の中に出てきて花屋のバケツからススキの束を引き抜くが、片方は弘美の部屋に残っている。これは、セネットの言う二重体験、分裂する選択の両方に引き裂かれながらの決断を意味し、従兄に対しての執着は残り、かつ断念するという分裂した心理を示している。また、引き抜かれてゆらゆら揺れるススキは弘美の不安定な心理である。そして、夢の中で弘美が買うサボテンは弘美が進まなければならぬ困難な道を示し

故にあつて亡くなり、亡くなった母から取り出された子供が真史だ、ということが分かるのである。自己の存在の「同一性」を確認できた真史は、存在の不安が解消され、麻紗子との結婚に向かう決心をするというところで小説は終わる。筋としては迷路の出口を見出し、自分の存在を確認するという通俗的なものであるが、通俗性を救っているのが「ゴミ屑」である。「リンゴの皮を剥く」という祖母の行為である。祖母は、主人公が来るといつもリンゴの皮を剥いて食べさせてくれていた。病床には必ず数個のリンゴが用意されており、祖母は主人公に食べさせるためにリンゴの皮を剥くのである。ところが長い間見舞いに行かなかつた間に入院していた少年にリンゴの皮を剥いてやつていたということが分かる。というのは、死んだ祖母の病室を訪ねて来た少年がそう告げたからである。主人公は亡くなった祖母の